興味深い絵解きはまだまだ続く。その解読には「箴言」にも似た響きがただよい、われわれの心を突き刺し、生き方の軌道修正を迫るものとなっている。一読をお薦めしたい。

（新村　拓）

〔岩波書店、東京都千代田区一ツ橋二―五―五、電話〇三―五二一〇―四〇〇〇、二〇〇三年二月二十七日、四六判、三四八頁、本体三四〇〇円〕

須磨幸蔵、島田宗洋、島田達生　編著

『世界の心臓学を拓いた田原　淳の生涯』

医学を学んだ者は誰でも、心臓の刺激伝導系の存在とこれを発見した田原　淳の名前を知っている。本書は季刊誌「ミクロスコピア」の主宰者である藤田恒夫さん（新潟大学名誉教授）が計画して、心臓とくに刺激伝導系に造詣の深い学者や田原先生とゆかりの深い十九名の方々に執筆を依頼された熱のこもった文章の集大成である。

その題目を列挙してみよう。（一）「刺激伝導系発見への過程」。田原淳博士の足跡をたずねて（島田達生、有田　眞）、刺激伝導系の発見と心臓学の進歩（須磨幸蔵）、田原　淳よりルドヴィヒ・アショフへの手紙（島田宗洋）。（二）「田原　淳の追憶」。田原　淳の生家―安岐町（中嶋剛一郎）、田原春塘と田原　淳―中津（川嶌眞人）、父の思い出（長岡・田原幸子）、祖父田原　淳の碑（村山暁）。（三）「田原淳への回帰」。マールブルク大学における日独医学協力について（ホルスト・ケルン）、ルドヴィヒ・アショフ―家族の思い出（ユルゲン　アショフ）、田原先生こちらを向いて下さい（須磨幸蔵）、刺激伝導系の田原原著復刻―黄色い表紙のモノグラフ（須磨幸蔵）、アショフ・田原国際シンポジウムについて（島田宗洋）。（四）「心臓学の進歩・発展への寄与」。田原結節（有田眞）、田原通り・九州大学医学部での田原先生（田口健一）、恒吉正澄）、心臓刺激伝導系の構造―田原のスケッチを電子顕微鏡で追う（島田達生、小野紀昭）、解剖学への貢献（柴田洋三郎）。（五）「田原先生を偲ぶ（生誕百年記念座談会）」。

この書をひもどけば田原先生の生涯、人となり、研究の詳細、後世への影響が生き生きと具体的に迫ってくる。

田原先生は明治三十六（一九〇三）年から三年間、ドイツ、マールブルク大学のアショフ教授のもとに留学され、アショフ教授の「肥大した心臓はなぜ弱いか」というテーマで研究を始められ、三年後（一九〇六）には、房室結節（田原先生の発見）がHis束に繋がり、それが右脚と左脚に分枝し、さらにこれが一八四五年にプルキンエの発見したプルキンエ線維に接続することをつきとめ、心房と心室のリズミカルな収縮と弛緩が神経による伝導でなく、特殊な心筋細胞（細胞体とその突起）によって行なわれていることを示し、さらに心臓全体の刺激伝導を取り仕切る系の全貌を解明し、「刺激伝導系（Reizleitungssystem）」と名づけられたのである。「本

書には田原先生が如何にしてこの素晴らしい研究を完遂されたかの足跡や苦労や喜びが物語られ、それを裏付ける、顕微鏡を覗きつつスケッチされた刺激伝導系の多くの筋細胞の見事な図が、質のまったく変わらない素晴らしい写真として登場してくる。

話は逸れるが、田原先生は養父田原春塘氏によって若い頃から絵心を培われ、ドイツへの船（日本郵船備後丸）の中で当時三十四歳の横山大観氏や二十八歳の菱田春草氏と画談、画論に花が咲いたということが本書に記されている。その偶然と必然のからみあいも田原先生の原著に見られる手書きの絵の描写力の素晴らしさの背景になっているのだろうか。

本書の大きな特色の一つは、巻頭や文中に配されている、見事に復刻された、数多くの素晴らしい写真である。たとえば、若かりし日の田原先生、田原先生の生家、ご家族、第一高等学校時代のある日（明治三十年一月一日）の日記の一部、マールブルク大学病理学講座の教室員、アショフ教授、アショフ教授の家族、田原先生が描かれた心臓の連続切片のスケッチ、特色のある黄色い表紙の田原先生の原著「Das Reizleitungssystem des Saugetierherzens（哺乳動物心臓の刺激伝導系）」と、本物と変わらないその復刻版を並べた心打つ芸術的写真などに接することができる。本書を繰っている間に、これらの見事な写真に魅せられて、いろんな角度から、当時に思いを馳せるだけでも、強い感動を覚える。

この書の中でとくに心をうたれるのは、マールブルク大学のアショフ研究室に留学中の田原青年が、アショフ先生に宛てて、自分の研究の進展状況の報告と将来への希望を、切々たる願いをこめて書かれた、アショフ家に残る六通の手紙である。本書には、そのすべての、手書きの原文（全文）の写真と、活字で印刷された全文と、さらに完全な日本語訳とが掲載されている。田原先生が、最初にアショフ教授から与えられたテーマは、「肥大した心臓は何故弱いか」の病理学的な追求であったが、ひつじの心臓を用いての、刺激伝導系の発見をもたらす特殊心筋の研究が進展し、両者を若い田原先生が一人で完成し得ない悩みと、刺激伝導系の研究を田原先生の主な仕事にしたいという願いとをこめて書かれたこの手紙は、アショフ先生を感激させ、その希望通りに、田原先生単著の「Das Reizleitungssystem des Saugetierherzens」が、一九〇六年に、イエナのグスタフ・フィッシャー社から出版されたのであった。

田原先生の研究は後世に大きな影響を与え、現在にいたるまで発展を続けている。本書の中の島田達生、小野紀昭両氏の項には、田原先生のスケッチに対応する刺激伝導系の細胞の電子顕微鏡像が二十三枚の美麗な写真によって的確にわかりやすく示され、柴田洋三郎氏の項には、刺激伝導系の心筋細胞間のギャップ結合の見事な超薄切片像とフリーズレプリカ像が示されている。

これを要するに、日本の生んだ偉大な医学者の生涯と業績を世に示した本書は、史実を正確に伝える生き生きとした文

章、心に残る美麗かつ適格な絵と写真、堅牢な装幀、上質の用紙、美しく正確な印刷など、どの角度から見ても、本書には人間の心と、人間が生みだした自然科学、歴史、文学、芸術などが渾然一体となって躍動しているといえよう。関心のある個人のみならず、図書館などの多くの公共機関で永久に保存されるべき名著であると私は信じて疑わない。

（藤田　尚男）

〔ミクロスコピア出版会、考古堂書店、新潟市古町通四―五六三、電話〇二五―二二九―四〇五〇、二〇〇三年、A五判　二五七頁、定価　四六〇〇円〕

遠藤　正治　著

『本草学と洋学　小野蘭山学統の研究』

小野蘭山の門人・飯沼慾斎が、我が国最初の近代的植物図譜『草木図説』を「閉居絶咎」して執筆したとの通説がある。はたして、「閉居絶咎」して科学的自然研究ができたのだろうか、という著者の素朴な疑問から出発したのが、この研究書である。

日本の本草学は江戸中期以降、いくつかの学統が形成されるが、小野蘭山によって一つの頂点に達したといわれている。本書は、本草学の通俗的なものではなく、京都で本草家塾を開いていた蘭山の学統を考察の対象にして、洋学の影響を受け国際的視野を備えた博物学的な本草研究の実態を探り、一八五六年に美濃出身の飯沼慾斎によって出版された我が国最初の近代的植物図譜『草木図説』誕生の環境を明らかにしている。

慾斎と同じ岐阜在住の著者が、二〇〇三年までの二十数年間にわたる調査から、これまでに発表した論文を改訂・再編成してまとめた集大成である。蘭山が『本草綱目啓蒙』を著したのは、一八〇三年のことで、奇しくもちょうど二〇〇年後の同じ岐阜の地で蘭山学統についての本書がまとめられ、京都で出版されて、蘭山の業績にスポットがあたることとなった。

蘭山の業績は、島田充房との共著『花彙』や『本草綱目啓蒙』に尽きるものではない。千人をこえる門人を育て、その学統によって江戸末期の本草学の大隆盛がもたらされたことも重要な業績に数えてよい。特に、尾張出身の水谷豊文・伊藤圭介あるいは美濃出身の飯沼慾斎らを育て、彼らによって、洋学を採り入れた博物学への転換がはかられ、日本における近代的自然史研究の端緒が開かれた点は特筆されねばならない、と著者は述べている。

蘭山の東アジア的な本草学とその学統の洋学研究とはいかにむすびつくのであろうか。日本の本草学が、中国本草学の受容に成功した後、中国の本草学とは明らかに異なった独自の展開を始めたのは江戸中期以降である。中国の本草学が薬性論に偏って多分に自然哲学的な考究に向かったのに対し